式典会場に設置する木製製作物を紹介

県内の建築系学科のある大学及び高等学校、特別支援学校高等部の学生や生徒の皆さんに製作いただきました。大会当日、主会場（式典会場）のおもてなし広場に設置します。

大宮工業高等学校

浦和工業高等学校

春日部工業高等学校

川口工業高等学校

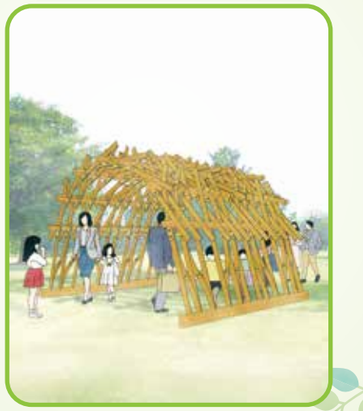
川越工業高等学校

久喜工業高等学校

モニュメント

ものつくり大学
建設学科

ウェルカムゲート


東洋大学
理工学部建築学科

ウェルカムボード

東京電機大学
理工学部建築・都市環境学系

熊谷工業高等学校

狭山工業高等学校

新座総合技術高等学校

大宮北特別支援学校
さいたま西分校

特別支援学校
さいたま桜高等学園

深谷はばたき特別支援学校

「木製地球儀」巡回展示

12/25～1/6
東松山市

1/31～2/5
長瀞町

2/5～2/10
皆野町

3/10～3/13
美里町

3/13～3/18
寄居町

1/6～1/9
滑川町

1/28～1/31
東秩父村

2/10～2/14
横瀬町

3/5～3/10
本庄市

3/18～3/24
熊谷市

1/9～1/15
嵐山町

1/23～1/28
小川町

2/14～2/19
秩父市

2/28～3/5
上里町

3/24～3/27
深谷市

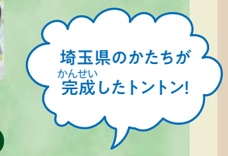
1/15～1/20
鳩山町

1/20～1/23
ときがわ町

2/19～2/25
小鹿野町

2/25～2/28
神川町

全国植樹祭のシンボル「木製地球儀」が県内63市町村をまわりました！



5月中旬までは埼玉県庁本庁舎1階南玄関に展示しています。まだご覧になっていない方はぜひお越しください。

本多静六コラム

第4話 本多静六の生き方・育英事業

今回は本多静六博士の生き方や育英事業についてお話をします。

静六は85年の生涯を通じて360冊あまりの書を著し、林学に留まらず、自身の経験に基づいた処世訓を数多く残しています。静六の残した代表的なことばとして、「人生即努力、努力即幸福」ということばがあります。人生は努力であり、努力は幸福を生むというこのことばは、まさに努力の人であった静六自身の生き方を物語ることばです。

また、静六が考案し実践した貯蓄方法として「四分の一天引貯金」があります。これは、毎月の給料のうち、四分の一の金額を貯金して積み立てていく貯金方法のことです。静六は、倹約や貯金方法を実践し続け、貯まったお金で山林や株を買い、資産をさらに増やしていきました。静六が40歳のころには、給料よりも貯金の利子や株の配当金の方が多くなったといいます。

莫大な富を築く資産家となった静六ですが、最終的には、その財産のほとんどを社会に還元すべく様々な公共機関に寄附されることになります。その中には、自身の出身地である埼玉県の次世代を担う若い人を対象として始めた育英事業があります。

まず、埼玉学生誘掖会をご紹介します。若い頃の静六は、勉学をする上で、経済的な困窮と向かい合わなければなりませんでした。この体験から、静六は、苦学している若い人へ経済的な支援ができないかと考え、明治35（1902）年に埼玉学生誘掖会を立ち上げ、東京に寄宿舎を建設し、埼玉県出身の学生のために、生活や通学の支援を行いました。平成13（2001）年、寄宿舎が廃止されるまで、多くの埼玉県民に利用されました。

次に本多静六博士奨学金制度をご紹介します。昭和28（1953）年、埼玉県で制定された「本多静六博士奨学資金貸与条例」に基づき、翌昭和29（1954）年から、埼玉県民の学生向けに貸与が始まった奨学金制度です。この奨学金の原資となるお金は、現在中津川県有林と呼ばれる、静六が埼玉県に寄附した山林の収益によって賄われています。この山林を埼玉県へ寄附した際、山林の木材売却などで得られる収益を、埼玉県民で苦学している学生向けの奨学金に充てることと、奥秩父地域の景勝地保護や林道整備の費用として充てることを条件としました。静六は昭和27（1952）年に亡くなりますが、静六没後に始まったこの奨学金制度は現在も続いており、多くの埼玉県民に利用されてきました。